



「KOMABA DAY」は月に一度実施している日で、世界で起こっている様々な問題に子どもたちが触れる機会を作っています。また、同日は募金箱も設置します。集まった募金は災害などの緊急支援や KOMABA の開校以来、その活動を応援し続けているトータルペインター・ミヤザキ ケンスケさんのプロジェクト OVER THE WALL に役立てられます。なお楽しみながらの活動を目指しているため、「KOMABA DAY」では講師は私服で授業をし、生徒は授業中の飲食を可としています。

コロナと伝統継承

京都「葵祭」の行列 4 年ぶり実施

葵祭は、およそ 1400 年前、凶作が続いた際に、欽明天皇が五穀豊穰を祈って馬を走らせたのが始まりとされている。呼び物は鮮やかな平安時代の装束に身を包んで都大路を練り歩く行列で、コロナの影響で 3 年連続中止となっていたが、今年 4 年ぶりに行われた。午前 10 時半、祭りの名前の由来となったフタバアオイを飾りつけたおよそ 500 人の行列が、京都御所を出発し、京都を訪れている上皇ご夫妻もご覧になった。

NHK News より



平安装束に葵の葉を飾った 1 キロにも及ぶ行列

祭礼の中止続く 継承に危機感も

コロナの影響で、伝統ある祭りは縮小や中止を余儀なくされていた。祭りは一度取りやめると再開に当たってはとても大きなエネルギーを要する。運営のノウハウも失われ、人々の生活リズムも祭りが無いことを前提としたものになってしまう。高齢化にも伴い各地で新たな継承の方法を模索する動きも出ている。祭礼文化に詳しい武蔵大の福原敏男教授は「密集を避ける心理が神輿や行列の小規模化を迫るなどコロナ禍が、伝統の転換点になる可能性がある。神が地域を回ることによって人々と近づき信仰を深めてきた祭りだが、多くの人が参加できる新しい技術の活用も必要になるだろう」と話した。



育てられた葵で葵柱づくりの指導をうける
小中学生 (PRtimes)

葵祭は私の地元で行われている祭礼で、友人の中には代々役目のある家系の子がいたり 1 日かけて伝統的な行列に参列する子がいたりして、私にとって身近にある祭りでした。「葵祭が再開した」という記事を読み私の中に「嬉しい」ではなく「そういえば」という感情がでてきたことに驚きました。中止されていた数年間で葵祭が“ない”ことが当たり前になっていたのです。もちろん時代が変わるにつれ、祭りのあり方は変わってきているでしょう。ただ知識や技術や思いの伝承がウイルスの影響で止まっていたという事実は悲しいものです。伝えたいのに伝えられない人がいて、“ない”ことが当たり前になっている人もいます。KOMABA はコロナ禍でできなくなったことがたくさんありました。先生たちはようやく制限のない授業ができるようになり伝えたいことが伝わりやすい形で実施できていることが楽しくて仕方ありません。制限がある中で得た良いところは残しながら、これからも大切だと思うことを伝えていければと思います。

(西出)